

Ⅲ 取組概要

～未来へ向かう探究のキセキ～

Ⅲ 取組概要 ～未来へ向かう探究のキセキ～

1 総合的な探究の時間「未来探究」（1学年）

ア 目的

各教科、科目等で身に付けた見方・考え方を働かせ、地域社会における生活とSDGsとの関わりの中で、主体的・協働的に課題を発見し、解決する過程を通して、自己肯定感や、着実に努力する姿勢・力を育み、地域貢献できる人材を育成する。

イ 日程

令和2年4月1日～令和3年3月31日

ウ 対象生徒

1学年 196名

エ 活動の概要

a 山北

RESASを用いて、山北町について調べ、山北町の魅力や抱えている課題を発見し、町の魅力をより効果的に伝えるために、そして課題を解決するための手段を考えて、グループ毎に発表するという流れで授業を実施した。

1、2時間目では、魅力のある都市とは何かを考え、実際に地方創生に取り組んでいる他県の例を取り上げ、山北町をどのような存在にしたいのかを考えさせた。次の時間からは、RESASを用いて、「人口」「地理」「産業」「観光地」「特産品」「雇用」「医療・福祉」「公共事業の状況・公共施設の利活用」の8つのテーマについて調べ、必要があればインターネット等で情報を収集した。8つのテーマから興味・関心を持った分野を選び、魅力や問題点を発見し、問題を解決している地方自治体・企業の先行事例を探しながら、問題点を解決するアイデアを考え、最後の時間では、グループ毎にスライドで発表した。

b 未病

未病についての概要を学習した上で、個人でテーマを決めて、その内容について調べた。次に、同じテーマ同士でグループを作り、設定したテーマに沿って、「未病」という概念を分かりやすく他人に伝えるための効果的な方法について考え、その成果を発表するという流れで授業を実施した。

1、2時間目では、未病の定義及び県西地区で実際に行われている未病の取組について学習をした。その後、生徒が日々の生活で気になることを書き出し、その中で未病に結びつくテーマを個人で設定し、設定したテーマに基づいて図書室やインターネット等を用いて調べ学習を行った。

3、4時間目では同じ系統のテーマを掲げた者同士でグループを作り、未病という概念を効果的に伝えるための媒体や、何を伝えたいのか等を考え、実際に伝えるための媒体を制作した。最後の時間では、グループ毎に調べた成果や実際に制作した内容について発表し、未病についての知識を共有し、理解を深めた。

c 防災

「やさしい日本語」「DIG 研修」「応急手当」の単元のオムニバス形式で行った。「やさしい日本語」では、「やさしい日本語」が生まれた背景やルールについて学習し、その後、実際にグループに分かれ「やさしい日本語」のポスターを作成した。「DIG 研修」では、山北高校周辺の避難所を探し、災害時に危険な場所を想定し、高校にいる際に災害に遭遇したらどのように行動するのかを個人で考えた。その上で、山北町の防災上の「メリット」「デメリット」について考察し、グループ毎に発表した。「応急手当」では、災害時における要救助者への対応を想定し、応急手当の基礎的な知識を身に付けた。さらに、心肺蘇生AED人形を用いて、心肺蘇生を実際に行い、緊急時に迅速に行動できるよう意識付けをする授業を行なった。

d フィールドワーク

「森林セラピーコース」「生涯学習センターコース」「農業体験コース」をクラス毎にローテーションで回り、山北町について学習を深めた。「森林セラピーコース」は未病と関連を持たせたコースで、山北駅付近から河村城址まで歩き、適度な運動と未病の関係性について学んだ。「生涯学習センターコース」では「竹ぼっくり制作」「竹切体験」「竹弓作り」「ゆずジュースづくり」から2種類選択して体験し、山北町の名産品や産業について学習した。「農業体験コース」では、農場まで歩きながら、防災対策について学習し、また、実際にゆずを収穫して山北町の農業や特産品について理解を深めた。

オ 成果及び評価

「山北」では、RESASを導入したことにより、生徒は信憑性の高い資料を扱うことの重要性を理解し、客観性の高い調べ学習を行うことができた。

「未病」では、初めに個人の興味・関心に沿って、「未病」の概念を学習したことにより、誰に対して、どのような発信方法がより効果的な普及・啓発につながるのかを考えて表現媒体を作成することができた。生徒は説明対象や説明内容に合った様々な表現方法があることを知るとともに、自身の興味・関心をより深めることができた。

「防災」では、様々な視点から、広く防災に関して学ぶことができた。このため、今までは生徒の考えが及ばなかった日常生活の中にある防災意識を向上させるとともに共有化を進めることができた。

1学年では、「情報収集」「資料分析」の力を身に付けることができた。また、教員の授業運営に関しても、1学年は「山北」「未病」「防災」で各担当者を決め、オムニバス形式で授業を実施したことにより、各担当の負担を軽減し、内容を充実させることができた。これは、初めて「総合的な探究の時間」に関わる教員でも、各々の教科の専門性や知識を生かしながら授業を行う工夫が奏功したと考えている。

カ 今後の課題

今年度、1学年の指導において主に二つのことを意識した。

一つは、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」といった一連の「探究のサイクル」を回してみることで、もう一つは、「まとめ・表現」で様々な表現方法とその効果的な活用方法を学ぶことを目標に取り組むことである。

この中で、「課題の設定」「まとめ・分析」、特に、「課題の設定」の指導が不十分であった。調

べれば分かる内容をテーマとして設定している生徒が多く、また、今年度は緊急事態宣言が発令されている中で、生徒は自宅学習において「課題の設定」についての学習を行わざるを得ない状況だった。そのため、「調べ学習」と「探究的な学習」の違いが分からないまま、一年間が終わってしまった生徒もいた。

したがって、今後の課題としてはまず、「調べ学習」から脱却し、「探究活動」になるように「課題の設定」に時間をかける必要がある。また、「まとめ・分析」においても、発表をすることに慣れていない生徒が多いため、「人に伝わる発表とは何か」を考え、十分に準備をした上で発表に臨めるような活動を取り入れることが必要である。次年度は、今年度不十分であった「課題の設定」「まとめ・分析」を重点的に授業で行っていききたい。

「課題の設定」における教員の課題は、「地域が抱えている課題や問題点 (Need)」と「生徒の興味・関心 (Will)」のバランスが取れた探究活動となるような指導方法を確立することである。このためには、生徒が伸び伸びとアクションを起こせるように、生徒の興味・関心に沿ったフィールドワークを実施することや、生徒の発案を実現に導く環境を作っていくことが必要である。また、フィールドワークに参加する際に身に付けた一般的なマナー等を、進路指導に結び付けていくことも今後、積極的に取り組んでいきたい。

(1) 山北

ア 目的

- ・ 課題発見、考察、分析、検証を通して論理的思考を身に付けたり、グループでの活動を通してチームワークやコミュニケーション力を身に付ける。
- ・ 教科の枠を超えて、生徒が社会に出てから必要とされる力や経験を養う。
- ・ 地方創生を「自分事」として考えて課題解決していく姿勢を養う。
- ・ 3年間の探究活動を通して地域創生の課題に取組、最終学年では、山北町に政策提言を予定しているので、その第一歩としての取組とする。
- ・ 1学年では約8時間の授業時間で山北町の課題（高齢化による未病、防災、地域創生）及び魅力を発見し、2学年及び3学年の探究活動につなげる。

イ 対象生徒

実施学年：令和2年度入学生（1学年）196名

教科：総合的な探究の時間「未来探究 山北」

単元：地方創生をテーマとした総合的な探究の時間

ウ 活動内容

「RESAS de 地域探究」に応募し『RESAS for Teachers』の副教材、地方のチェンジ・メイカー育成プログラムを参考に学習指導案を作成し以下のように実施した。授業は毎回2時間連続で行い4日間で行った。

また、この取組の成果を2つの発表会で披露した。

（参加生徒 1年1組 井上せな 酒井真奈美 中老綾）

参加した発表会

- 第1回 Grass Roots Innovator Contest in Kanagawa 2020年11月22日（日）
- 探Q！RESAS「RESAS de 地域探究」実践校による成果発表会 2020年12月13日（日）

～はじめに（導入）～



授業の目的、目標を理解させながらQ1～Q4をグループワークもしくは個人ワークで行い、ターゲットとする山北町について考えさせた。

～探究テーマとする山北を町設定しよう～

山北町について改めて考えさせることで、興味・関心や疑問点を持たせる。自分の住んでいるところや将来自分が住む町などと神奈川県山北町を関連付けることを意識させた。

自分が住みたい町や、住んでみたい町をイメージし、その魅力を考えさせた。山北町は現在、人口が一万人を下回っており、他地区との比較をさせ、その原因などについて考えさせた。また、RESASを活用して人口が減少しているのか、または維持しているかなどをデータから読み取り視覚で考えさせた。

～山北町について調べよう～

山北町について8つのテーマ（人口、地理、産業、観光地、特産品、雇用、医療福祉、公共事業の状況・公共施設の利活用）について調べ、興味を持ったテーマを選択し、探究テーマを設定させる。



2. 山北町について調べよう

調べるためのヒント！

【情報・データを集める方法】

- ・地方自治体のデータをまとめたアプリ（地域経済情報システム・RESAS）

ブラウザ：Google Chromeを使用すること

- ・地誌集
- ・地方自治体のHPなどインターネットを活用する
- ・アンケート
- ・インタビュー
- ・新聞・雑誌
- ・文献



この授業は
山北町を魅力ある町へ変えることができる
地方創生プロデューサー
になるための時間です。

Q1
あなたにとって
魅力ある都市とは
どんな都市ですか？

Q2
あなたが住んでいる
都市の魅力とは
どのようなものですか？

Q3
動画で魅力ある都市とは
どのようなものがイメージしてみよう。

【活動1】
インターネット検索エンジンから「地方創生×産業アイデアコンテスト」を検索。これまでの応募アイデアコンテストの全国大会の受賞プレゼン動画を観て、

- ①どの地域を得意にしているか？
- ②その地域の強みや
- ③強みやをどのような魅力に変えることができたか？

を発見しよう。

Q3
動画で魅力ある都市とは
どのようなものがイメージしてみよう。

【活動2】
次の自治体の取り組みを見てみよう。
動画共有サイトで「IT活用で就業へ移行」
を見てみよう。

強みやの取り組みから地方創生をヒントを探ろう！

Q4
あなたならこれから山北町を
どんな存在にしていきたいですか？

～山北町の魅力と課題を見つけよう～

「魅力を発見する。問題点を発見する。」決定したテーマについて、より深い情報を収集させる。

①各グループでブレインストーミングを行い、魅力や問題点を書き出し一枚にまとめ、全体で情報共有し、深掘りさせた。

②ワークシートに沿って、5W1Hを意識しながら調べさせ、山北町の魅力及び問題点についてブラッシュアップし、ピラミッドチャートを活用して情報を深め、焦点化を進め、また、ロジックツリーを使って本当の問題点を追究させた。

③問題を解決している地方自治体・企業の先行事例について調べさせた。

4. 山北町の魅力と課題を見つけよう

②問題点を発見する

- ・ R E S A S のデータから問題点を抽出する。
- ・ 新聞・雑誌などニュースから問題点を抽出する。
- ・ すでにある地域の問題点をデータなどから探す。

【発掘】フィールドワークで、インタビューやアンケート調査を行う。
(ポイント) 誰が困っているのか？ 誰のためのものか？ も考えて書いておこう。

※年書きで挙げてみる。

4. 山北町の魅力と課題を見つけよう

決めたテーマ

{ 山北町 } の { }

地域の問題を見つけるために情報を収集しよう。

① 魅力を発見する
② 問題点を発見する
③ 魅力をブラッシュアップする
④ 問題点をブラッシュアップする
⑤ 今回解決したい問題点を深掘りしてみよう
⑥ 問題解決している地方自治体・企業の先行事例を探す

4. 山北町の魅力と課題を見つけよう

③魅力をブラッシュアップする

ピラミッドチャートで魅力を明確にする

(ピラミッドチャートの方法)

1. 一番下の階層に、①で挙げた魅力をたくさん書き入れる (書き込みは、思い込みや常識)
2. 書き入れた言葉を音読みしながら、マトリックス図の枠線に沿って書き込み、書き込みの方向性を定める
3. 一番上の階層から、書き込んだ言葉の中から最も大切な言葉を選び出し、書き込みを繰り返して2番目の階層に書き入れる (階層が増えてもよい)
4. 2番目の階層からより重要な言葉を選び出し、一番上の階層に書き入れる

※1つに絞ってしまったり一般的な魅力に留まるといけないので、地域特有の魅力を入れて2〜3つの魅力を書けるようになる

4. 山北町の魅力と課題を見つけよう

⑤問題点を深掘りする

ロジックツリーで本当の問題点を見つけ出そう。問題点からなぜ？を繰り返していく。

「③問題点をブラッシュアップする」で挙げた問題点を深掘りする

【例】観光客が少ない

なぜ？

- 原因①
 - 原因①-1
 - 原因①-2
- 原因②
 - 原因②-1
 - 原因②-2
- 原因③
 - 原因③-1
 - 原因③-2

※なるべく5階層以内で済ませたい (必要に応じて追加しよう)



～問題点を解決するアイデアを考えよう～

問題点を解決させるアイデアの創出とアイデアを広げるイメージマップを作成させる。

ブレインストーミングを行う際に、多くのアイデアをグループで出し合い、他者の意見を受け入れることに留意させた。イメージマップをもとにこれまで考えたアイデアを整理し、魅力や問題点をグループでまとめ、解決策を考えさせた。

4. 山北町の魅力と課題を見つけよう

⑥問題解決している地方自治体・企業の先行事例を探す

問題のテーマで情報検索に取り組んでいる自治体や企業の事例を探し、取り組みによる解決されていることとされていないことを整理してみよう。インターネットを活用し、取り組みを探してみよう。

【事例】

解決されていること	解決されていないこと



5. 問題点を解決するアイデアを考えよう

①問題点を解決させるアイデアの創出とアイデアを広げる

～イメージマップの作成～ 作成後、重要なアイデアを抽出する

解決すべき問題点 (課題)

6. アイデアの検証をしよう

①アイデアを実現するための方法(手段)が現実可能か調べよう

アイデアについて検証する

実現可能性

実現可能性

実現可能性

実現可能性

ここに記入するアイデアで実現したい

※1. 実現可能性・実現性が高い場合は、書くためにアイデアをアップデートする。
②③④⑤に集まっているアイデアを広げるか追加のアイデアを凝視してみよう。



～アイデアを検証しよう～

アイデアを実現させるための方法（手段）が現実
に可能か調べさせる。

次の三点について検証させる。

- ①具体的な方法（手段）
- ②実現するための資金・場所・運営方法
- ③実現するための壁（障害）問題点

また、アイデアの証拠（根拠）を見つけ、アイデアを
整理させた。

- ①座標軸を活用し、アイデアを確認する。
- ②ピラミッドチャートを活用し実現方法を深める。
- ③ワークシートに箇条書きで挙げる。
- ④RESAS などのデータを活用し証明する。

また、ターゲットに対して必要があるかどうかを検証
する。データ（グラフ・表）を基に根拠を示し、ワーク
シートにまとめ、アイデアによる直接的・間接的・相乗
的効果についても仮説を立て、ピラミッドチャート、マ
トリックスを用いて検証させた。

5. 問題点を解決するアイデアを考えよう

②アイデアを整理しよう

③で出したアイデアからメインのアイデアを決めて今後、企画立案していく

【ターゲットの課題】解決のための対策は4冊か？

【理由】

3つ以内挙げる

【理由】

今回解決したい
深掘りした問題点を詳しく書き入れよう

↓

具体的アイデア（案）

「5. ①アイデアの創出と生み出したアイデアを広げる」
で作成したイメージマップから3つ選んで書き入れよう。

6. アイデアの検証をしよう

② アイデアの証拠（根拠）を見つけよう

- ・RESASなどを活用しデータを収集する。
自分たちのアイデアに似た他の自治体の事例による
効果をデータで証明する。
- ・自分たちのアイデアに需要があるかどうか市場調査を行う。
地域の方々へのインタビューをする。
アンケートなどによる数値的根拠を示す。

↓

「アイデアによって問題点がどのように解決できるか？
予想される効果・実現させたい効果」
「アイデアによって予想される問題点の解決以外の相乗効果・実現
させたい相乗効果」
についてもまとめる。

6. アイデアの検証をしよう

①アイデアを実現するための方法(手段)が現実可能か調べる
・アイデアについて検証する

実現可能性
低い

緊急性高い

ここに
アイデア
を入れる
か？

実現可能性
高い

緊急性
低い

※1. 実現可能性・緊急性が低い場合は、
高くなるためにアイデアをアップデートさ
せる。
※2. 「5. ①」に際してアイデアを広げるか
追加のアイデアを提案してほしい。



6. アイデアの検証をしよう

①アイデアを実現するための方法(手段)が現実可能か調べる
→ アイデアを実現するための資金・場所・運営方法
アイデアを実現するための具体的な計画を考える

アイデア

【ピラミッドチャートの方法】

1. 一番上の階層に、アイデアを入れる。
2. 二番目の階層に実現するための資金・場所・
運営方法について書き入れる
3. さらに実現するための必要な事項を詳しく三
番目の階層に書き入れる

6. アイデアの検証をしよう

③アイデアを整理しよう 横線を新章までアイデアを整理してみよう。

【ターゲットの課題】解決のための対策は4冊か？

【理由】

3つ以内挙げる

【理由】

今回解決したい
深掘りした問題点を詳しく書き入れよう

↓

具体的アイデア（案）

実現するための資金（仮定）

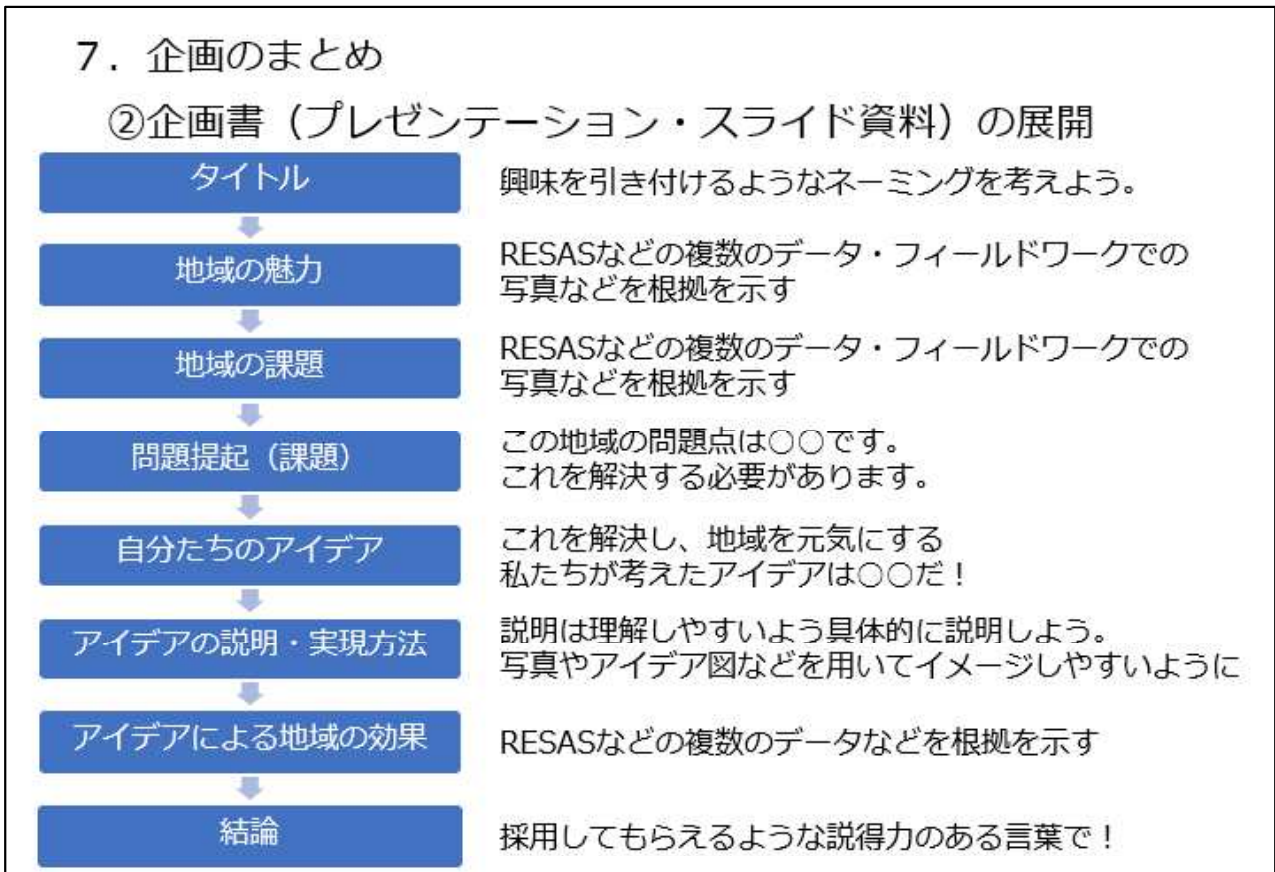
実現するための場所（仮定）

アイデアによって問題点がどのように解決できるか？
予想される効果・実現させたい効果

※「6. ②アイデアの証拠（根拠）を見つけよう。」
で収集した情報から、仮説を考え、その根拠を示す。
（なぜそう言えるのかを示すエビデンスを採ろう）

アイデアによって予想される問題点の解決以外の
相乗効果・実現させたい相乗効果

※「6. ②アイデアの証拠（根拠）を見つけよう。」
で収集した情報から、仮説を考え、その根拠を示す。
（なぜそう言えるのかを示すエビデンスを採ろう）



アイデアを用いて政策提言を行うために企画書にまとめさせた。

企画書にまとめる際の注意点として

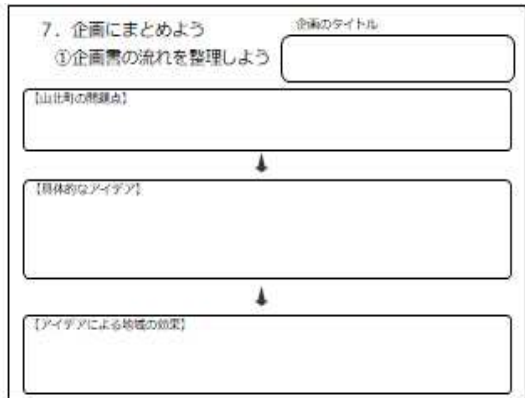
- ①企画の流れを整理、企画書にまとめる。
- ②企画を整理し、企画書の展開を理解し、作成していく。

この2点を意識させた。

また発表を行うときに、何を意識するか（調べ学習と探究の違い）を確認し、事前にプレゼンテーションに向けた準備を行わせた。

- ①プレゼンテーションとはどういうものか？
- ②プレゼンテーションの目的
- ③プレゼンテーションを学ぶことの意味
- ④良いプレゼンテーションができるポイントとは？

プレゼンテーション発表会に向けて、その目的と効果を学び、スライド資料の作成とプレゼンテーションの練習を行い、プレゼンテーションに必要な要素を見つけ、発表に反映させた。



～校内にてプレゼンテーション発表会を行う～

プレゼンテーション発表会にあたり、プレゼンテーションとは何か、なぜプレゼンテーションが必要なのか。

- ①相手に伝える。
- ②相手に理解してもらおう（伝える）。
- ③相手に行動してもらおう。

以上の3点を意識して行うように指導した。

そしてプレゼンテーションを学ぶことの目的として、

- ①自分の考えを理解してもらうことができる。
- ②自分の思った通りに行動してもらうことができる。
- ③周りから「分かりやすい」と信頼してもらえるようになる。
- ④コミュニケーションが格段に取りやすくなる。

以上の4点を教え、コミュニケーションの大切さを学ばせた。

さらに、『地方創生☆政策アイデアコンテスト』受賞者のプレゼンテーションを参考に、プレゼンテーションの効果的となるポイント（重要な要素）を考えさせた。そして、グループ毎に話し合い、特に必要と考えるポイントを箇条書きで7つ挙げ、重要度の高い順に並べ、プレゼンテーションを行う際にその7つのポイントを重視するように指導した。

グループ毎に作成させた「プレゼン評価表」を使って、他のグループのプレゼンテーションの評価をすると同時に、良かったところ、自分たちも取り入れたいポイント（箇条書き）を挙げさせた。発表会は、発表5分以上、質疑応答2分、講評1分で行い、次のグループが準備している間に発表したグループの評価を行い、すべての発表が終わった後に自分のグループの評価をさせた。そして、全体の講評及び各自の振り返りを行わせた。



エ 成果及び評価

11月22日(土)第1回「Grass Roots Innovator Contest in Kanagawa」に参加。発表会はZOOMを使用したリモート発表であった。

各講評者からいただいた講評の中には厳しいものもあり、少し気落ちした所もあったが次の発表に目を向け様々なアイデアが湧きだしていた。今回の発表では他の発表者との交流もでき生徒も喜んでいて。今回の発表で奨励賞をいただいた。

RESASを導入したことにより、生徒は信憑性が高く、客観性の担保された資料を扱うことの重要性を理解した。

データから神奈川県内の各地域の人口や産業などと比較することで、山北町の人口減少推移が見られ、本校に通っていることから山北町を活性化させるという課題に取り組む意欲を高めることができた。また、観光や特産品に興味を持ち、神奈川県内に限らず、観光地で有名な県外地域に比較対象を広げ、山北町と共通点がありながら地域創生が成功している地域との比較をする生徒もいた。

このように、生徒の意欲を高め、視野を広げられたことは大きな成果である

また、発表を繰り返し行った結果、プレゼンテーションで壇上に立つことへ抵抗感を小さくすることができ、今後、さらに生徒の成長が期待できる。



Grass Roots Innovator Contest in Kanagawa
募集要項

探究活動の成果発表に向けた「学びの場プラットフォーム」

- 問題解決に向けて取り組むプロジェクトについて発表を行います
- 動画での参加を集め、アドバイザー及び参加者同士のリフレクションをオンラインで行います

募集期間
2020.10.1~11.15
リフレクション大会
2020.11.22 13:00~15:00
募集要項(pdf)
申込みはこちら

「Grass Roots Innovator Contest in Kanagawa」募集要項

- 対象者
神奈川県、地元市町村等の地域を超える課題解決をテーマとしたプロジェクトなど、様々な探究活動に挑む神奈川県内に所在する高等学校等に在籍している高校生個人及びチーム(中高混在可)で11月22日に開催するリフレクション大会に必ず参加できる者とする
- 募集期間
令和2年10月1日 ~ 令和2年11月15日
- リフレクション大会
令和2年11月22日 13時~15時
なお、リフレクション大会はオンライン(Zoom)で実施するが、詳細は別途連絡する
- 発表内容
取組んでいるプロジェクトや探究活動に関するピッチ(プレゼン)を10分以内の動画にまとめる。
- 応募方法
① Google アカウントを作成する(既に学校等から与えられている場合はそれを使って良い)
② 申込先フォームで申し込む
③ 登録したメールアドレス(Google アカウント)に動画をアップするURLを送付するので11月15日までに動画をアップする

申し込みURL <https://forms.gle/3266UP12nd0k1p5T7>



主催
NPO教育かながわフォーラム

後援
神奈川県教育委員会

8 表彰
最優秀賞(NPO教育かながわフォーラム理事長賞)
準最優秀賞受賞者は「マイプロジェクト国際 Summit 大会」への出場権を与える

9 評価者
高校教育課指導主事、県立高等学校長、有識者、NPO教育かながわフォーラム

- 10 その他
- アップされた動画は返却せずに主催者が責任を持って削除する
 - 動画の2次利用は行わない
 - 動画発表は10分以内、mp4ファイルとし、発表方法等については特に制約は設けない

問い合わせ先
NPO教育かながわフォーラム
担当 時兼 洋昭
Mail k2hiro0816@gmail.com

各講評者からの講評

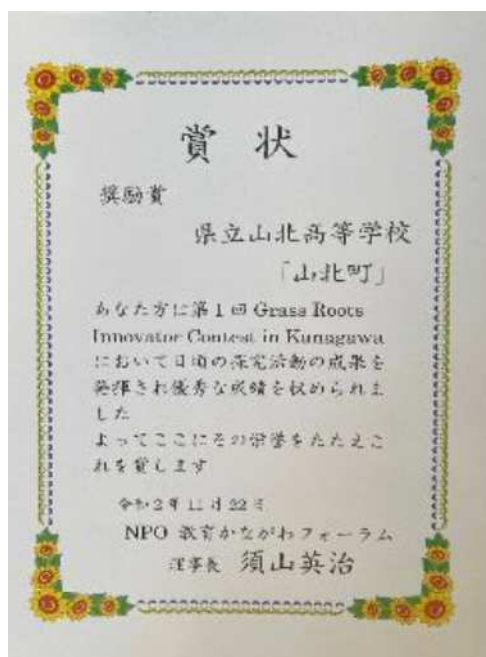
- ・ 住地域の活性化に向け高校生らしい視点で訴えている。PR映像など、大変わかりやすい活動となっている。是非、山北町の活性化に向け、次の一手を講じてもらいたい。
- ・ フードロスの問題を含めた山北町の可能性への提案は素晴らしいと思いました。
- ・ 地域の強みと課題を分析し、魅力を最大限生かすための手立てを具体的に提案している点が印象的です。皆さんの瑞々しい感性を生かして、魅力ある山北町の発信に取り組んでほしいと思います。
- ・ 山北町の課題をしっかりと捉え、課題を設定している。しかし、動画を作成した成果や課題の振り返りなど、検証が不十分に思われる。今後の展開に期待する。

発表から得た新たな気づきや学び

自分が住む地域の活性化を達成するにあたって、自分たちが有名になる、という案は面白いと思いました。神奈川県で都心に近い街があんなに自然豊かな魅力的な所だとは知りませんでした。しかし、彼女たちが言っていたように、観光客を増やすことを達成すると、山北町のように自然豊かな場所がごみなどで汚れてしまう可能性があるという意見に共感する。以前、学校の授業内でオーバーツアリズムについて、ディスカッションし、これは解決すべき課題だと感じました。彼女達の動画から観光業が与える利点と懸念点をより考えることができました。

参加者からの応援メッセージ

山北町にとっても魅力を感じました！！自然が大好きなので、とても訪れたいです！動画を作って拡散するなど、SNSの活用は最も有効的だと私も思います。提案として、山北町のキャッチコピーなどを考えて、ハッシュタグとして使い、知名度を上げるというのも良いかと思います。



- 2020年12月13日（日）探Q! RESAS 成果発表会に参加。



神奈川県 神奈川県立山北高等学校、相模原市立青和学園

2020年12月13日（日）【A】

埼玉県立皆野高等学校 / 我孫子市立新木小学校 / 葛飾区立水元中学校 / 東京都立八王子東高等学校 / 神奈川県立山北高等学校

2度目の発表ということで前回の反省をいかして発表に臨むことができた。

発表後2月4日校内発表会に向けて様々なアドバイスをもらい、発表の修正やブラッシュアップを行った。実際に山北町の風景を写真に収め、また山北町民にインタビューを行った。

発表と振り返り、ブラッシュアップを経験することにより、生徒は事前準備の大切さと現地に足を運びことの大切さを知ることができた。

オ 今後の課題

授業を通して山北町に興味・関心を抱き、山北町の地域創生に向けてアクションを起こしたいと感じ、山北町をたくさんの方に知ってもらいたいと思い、行動に移した生徒も見られたが、全生徒の取組としては、浸透していない。一人ひとりの興味・関心を喚起する仕掛けを工夫し、より多くの生徒の意識を高めることが課題である。

この授業では、グループワークを中心に進めたが、自分自身の取組を進めるのではなく、誰かに頼る者も散見されたため、一人ひとりの責任感を醸成するような授業展開の工夫が必要である。

(2) 未病

ア 目的

課題の発見、考察、分析、検証を通して論理的思考力を身に付けたり、グループでの活動を通してチームワークやコミュニケーション力を身に付ける。

教科の枠を超えて、生徒が社会に出てから必要とされる力や経験を養う。

未病とは何かを理解するとともに、未病普及のために必要な要素を検討し、有効な情報発信媒体を作成する。

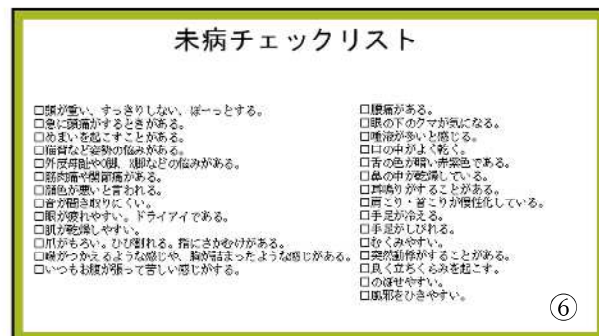
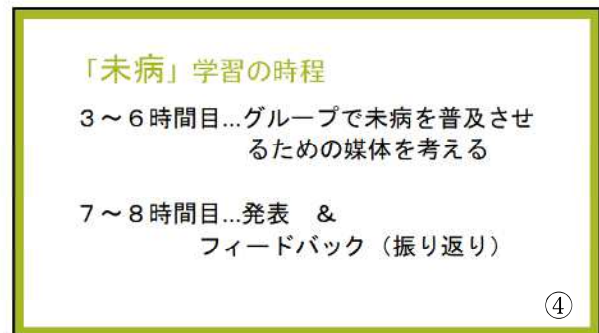
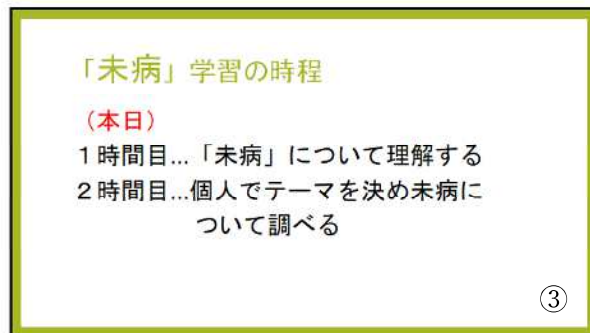
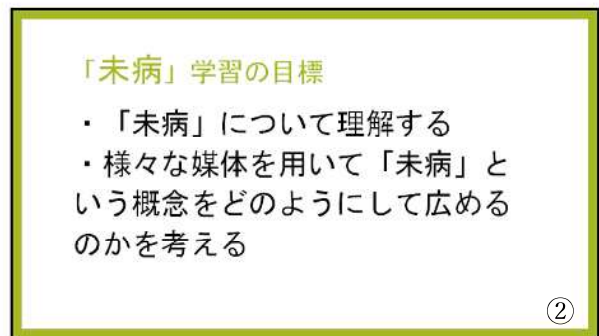
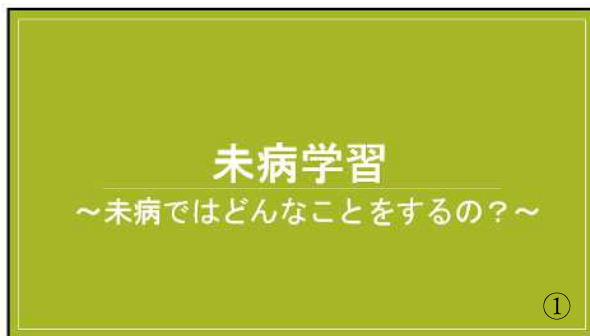
イ 対象生徒

1 学年(196 名)

ウ 活動内容

a 1、2 時間目

1 時間目に PowerPoint を用いて「授業の流れ」「未病とは何か」について説明した。その後、自分の事と未病をつなげるために、現在、自分が気になること（健康面・食生活・日常生活など）を考えさせ、2 時間目に興味・関心を持った分野を選び、課題を設定させた。



なぜ「未病」という考えが生まれたのか

○2025年問題

団塊の世代が75歳以上の後期高齢者に。
高齢化率が30.3%

⑦

なぜ「未病」という考えが生まれたのか

現在の社会システムの未整備は
医療や介護などの制度が崩壊の危機に
陥る！2025年問題

⑧

なぜ「未病」という考えが生まれたのか

このような問題を解決し持続可能な
社会を維持していくためのキーワード
「未病」

⑨

ワーク1に取り組もう

⑩

未病のイメージ



⑪

未病とは

「健康か病気か」の2つの領域で捉えるのではなく、「健康」と「病気」の間で連続的かつ可逆的に変化するものと捉え、すべての変化の過程を表す概念

⑫

未病とは

「予防」を意味するだけではない。
感染症予防や生活習慣予防の他にも
その前段の積極的な運動・食生活・休養
などの健康増進。
楽しく生きるための工夫や魅力的にあり
続けるための努力など健康生活に関わるもの
も含まれる。

⑬

「未病」を改善する3つの取り組み



⑭

県西地区の未病の取組

高齢化率（65歳以上）【平成27年】

小田原市	27.2%
南足柄市	28.6%
足柄上郡	28.1%
足柄下郡	36.4%

全県
23.4%

⑮

県西の未病のプロジェクト

柱1：未病がわかる
未病について十分な
理解をはかる
→「BIOTOPIA」
の設置など



⑯

県西の未病のプロジェクト

柱Ⅱ：未病を改善する

【食】薬用植物を利用したレシピ開発や
農林水産物の新商品開発など

【運動】ウォーキングの普及
スポーツイベントの誘致 など

【癒し】効果的な入浴方法
新たな温泉活用の提案など

⑰

県西の未病のプロジェクト

柱Ⅲ：未病でつなぐ地域の活性化

「未病を改善する」県西地域の資源を効
果的に連携させて新たな観光を推進する

⑱

自分について考えてみよう

現在、あなたが気になること
(健康面・食生活・日常生活等)
を挙げてみよう。

⑲

未病コンセプト

「自分がどう生きていきたいのか」
という発想が原点となる。

⑳

b 3、4、5、6 時間目

各自で課題設定したテーマから同じような内容である者とグループを作り、グループのテーマを設定し、図書館やインターネットを活用してテーマについて情報収集をしたり、屋外で動画を撮影するなど発表に向けた活動をさせた。



c 7、8時間目

1 グループ当たり【準備（1分）⇒発表（2分）⇒質疑応答（2分）】計5分を目安に各グループのプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションを聴いているグループはフィードバックシートに評価を記入し、その感想をコメントシートに記入した。ルーブリック評価を活用し、自己評価と他者評価を行い、自分事に落とし込むことを意識させ、事象の考察をさせた。



エ 成果及び評価

短い期間にも関わらず、課題の発見、考察、分析、検証を行うことができた。クラスアンケートにより実状を調べるグループや、動画や絵本を使って説明するグループ、クイズ形式にして興味を持たせるグループなどさまざまなアイデアがあった。プレゼンテーションにおいて、どのように工夫をすれば相手に伝わりやすいかを深く考えさせることができた、

ルーブリック評価による自己評価をグラフ化してみると全体的に高い評価をする生徒が多かったことから「未病」を知るきっかけになり理解が深まったと捉えている。振り返りシートからも「次にグループ活動があるときに興味や疑問に感じることを探究していきたい」「次はグループで役割分担をして未病についてもっと調べたい」「他の班が発表していたものを自分でも調べてみようと思った」など次回の探究活動について前向きな姿勢が見えたり、未病について関心を持てたりと授業の目的を達成できたと判断できる記載内容が見られた。

ルーブリック評価とは…

ルーブリック評価とは学習到達状況进行评估する評価基準のことを指します。

簡単に言うと、この授業(単元)を通して「何ができるようになったら評価が高くなるのか」を示すものです。

「未病」の時間では最後に発表を行ってもらいます。

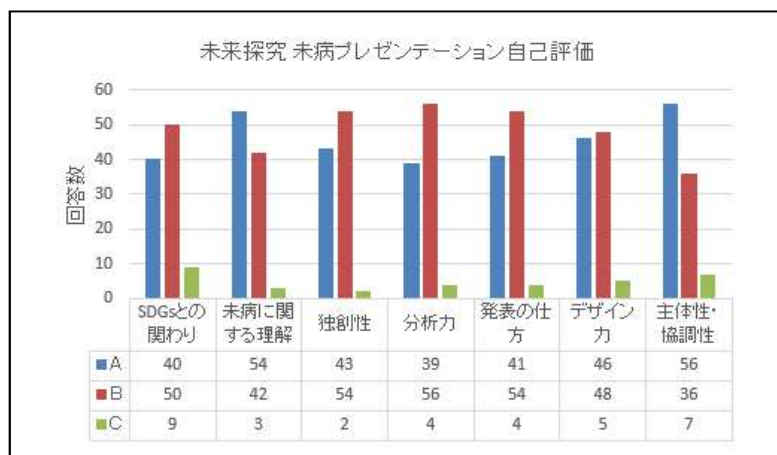
最後の発表でどうすれば良い発表になるのかを考える際に、参考になるのが下記にあるルーブリック評価になります。

ぜひ、**A**を目指してグループ活動・発表を行って下さい。

観点	評価項目	到達度		
		A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	C (努力を要する)
知識 技能	SDGsとの関わり	SDGsとの関わりを理解して発表できた。	SDGsとの関わりを意識して活動できた。	SDGsとの関わりを意識して活動できなかった。
	未病に関する理解	「未病」について十分理解し、自分事として捉えることができる。	「未病」について理解している。	「未病」についてあまり理解できていない。
思考 判断	独創性	テーマの設定や発表媒体が、既存のものを興味深い切り口で捉えた新しいアイデアであり、これまでにない斬新で独創的なものである。	テーマの設定や発表媒体が、既存のものを興味深い切り口で捉えた新しいアイデアである。	テーマの設定や発表媒体が、既存のものから着想を得て作られたアイデアである。
	分析力	適切な分析方法を用いながらデータを分析し、課題の本質を見極めることができ、テーマに対して自分の考えを構築することができる。	比較等を用いてデータを分析し、一定の妥当性のある結論を導くことができ、ある程度筋道をたてて自分の考えを構築することができる。	データをあまり利用せず、一定の筋道を立てて自分の考えを構築することができなかった。
表現力	発表の仕方	話し方を工夫するなど、聞き手を見ながら発表することができる。	発表内容を理解し、聞き手を見ながら発表することができる。	メモを見ながら発表している。
	デザイン力	イラストやグラフなどを用いて聞き手が見やすいように工夫し、聞き手が内容を理解しやすいような構成になっている。	イラストやグラフなどを用いて聞き手が見やすいように工夫している。	文章だけで構成され、まとまりがなく内容が不十分である。
主体的に取り組む態度	主体性・協調性	グループ内での役割を理解し、班員と協力してグループワークに取り組んでいる。	グループ内での役割を理解してグループワークに取り組んでいる。	指示を待って行動し、主体性が見られない。

オ 今後の課題

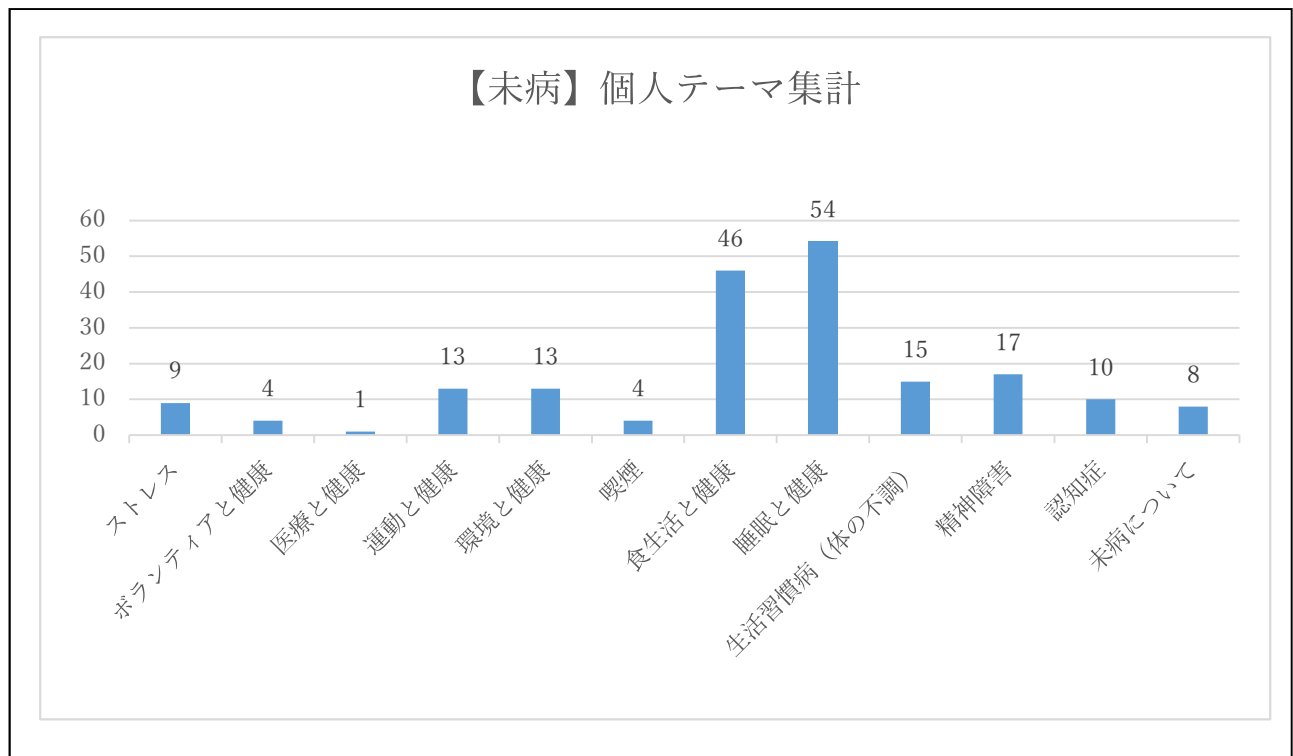
生徒が決定したテーマと未病との関わりを明確に示せるよう効果的に助言することが重要である。未病という概念の理解と設定したテーマと未病との関わりについて考える時間を増やすことにより解決できるとの仮説を立てることができたので、次年度に引き継ぐこととする。



【グラフ①】

導入段階で、健康を起点として考えさせたことがミスリードにつながった可能性も考えられる【グラフ②】。未病の改善＝健康というイメージが強くなり、その結果、健康になるという観点から生徒の個人テーマが「睡眠」「食」という設定に偏ってしまったと分析している。導入段階の工夫及び改善が必要である。

できる限り生徒自身が身近に感じられる課題をみつけること、その課題を「誰に伝え、理解してもらいたいのか」「誰がどのように改善するのか」などについて意識させることで「自分事」として探究できるように支援する。また、時間数や授業構成を再検討し、一人ひとりが未病について理解したうえで探究活動に取り組めるように今後、計画していきたい。



【グラフ②】

(3) 防災

ア 目的

- ・ 災害等の危険を予測して回避する能力や、社会の安全に貢献できるような資質を身に付ける。
- ・ 周囲と協力して共通の課題を達成できるようになる。

イ 対象生徒

1 学年 (196 名)

ウ 活動内容

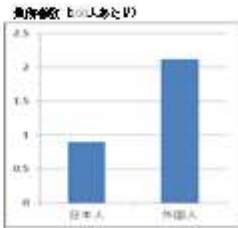
a やさしい日本語

活動に入る前に、導入として「やさしい日本語」について生徒にスライドを用いて説明した。「やさしい日本語」とは、日本語に不慣れな外国人にも分かりやすい簡単な日本語のことである。現代の日本には様々な外国人が訪れており、当然、その外国人すべてが日本語を不自由なく使えるというわけではない。そのような日本語に不慣れな外国人が日本で暮らす上で、様々な問題が考えられる。例えば、日本語が十分に分からず情報を受け取れないこと。日本語を英語に翻訳したとしても英語の表記だけでは不十分であること。そのために多言語へ翻訳するとしても時間がかかること。これらの問題は通常的生活の中で時間をかけて翻訳し、学びながら暮らしていくことができる。しかし、災害時は一分一秒が生死を分ける。外国人に情報を素早く、正確に伝えるために考え出されたのが「やさしい日本語」である。

生徒には、上記の「やさしい日本語」という概念について説明をしたあと、「やさしい日本語」ができた経緯、普通の日本語との比較、活用例、「やさしい日本語」のルールを紹介し、それらを踏まえて実際に阪神淡路大震災で読まれたニュース原稿を「やさしい日本語」に直すというワークを行った。

「やさしい日本語」ができたきっかけ

- ・阪神淡路大震災
(1995年1月27日)
- ・マグニチュード 7.2
- ・最大震度 6
- ・死者 6千人



「やさしい日本語」の活用例



普通の日本語と「やさしい日本語」の比較

普通の日本語

今朝、5時46分頃、兵庫県淡路島付近を中心に広い範囲で地震がありました。東京府では、今後もしばらく余震が続くうえ、やや規模の大きな余震が起きるおそれもあるとして、地震の揺れで壁に亀裂が入ったりしている建物には近づかないようにするなど、余震に対して十分に注意してほしいと呼びかけています。

「やさしい日本語」

今日 朝 5時46分、兵庫 大阪などで、大きい 地震が ありました。

余震<あとから 来る 地震>に 注意して ください。

地震で 壊れた 建物に 注意して ください。この後も 注意して ください。

(1)簡単な言葉にする

日本語能力試験N4、N5レベル

- ・挨拶や自己紹介ができる
- ・小学校低学年レベルの国語
- ・簡単な文章が読み書きできる

(1)簡単な言葉にする

〈例〉

危険	→ あぶない
休校	→ 学校は 休みです
避難	→ 逃げる
暖かくする	→ 服を たくさん 着る

(2)1文を短くする・分かち書きをする

地震の揺れで壁に亀裂が入ったりしている 建物に近づかないでください

地震で 壊れた 建物に 気をつけて ください

建物が 壊れています 気をつけて ください



導入後、誤った「やさしい日本語」のポスターと白紙のポスター用紙を渡し、訂正した「やさしい日本語」のポスターをグループで作成させ、変更した点や工夫した点等を発表させるというグループの活動を行った。「やさしい日本語」の文章を作る過程で、難しいことばを相手に伝わりやすいことばに変換する大切さや難しさを感じられるようにし、多文化共生社会についての理解や災害時における支援方法について考える契機となった。

b DIG 研修

各クラスで4～5人ずつの班活動を通じて、学校周辺の危険箇所や災害時に有用な施設等を地図等から探し出し、災害時の活動に役立つ知識を身に付けるとともに、災害時をイメージし、日常の防災意識を高めることを目的とした。今回は震度7の地震を想定した。

DIG 研修の方法は、公益社団法人S L 災害ボランティアネットワーク作成のマニュアル「DIG（災害図上訓練）研修用資料『MISSION NOTE』」を参考に、山北高校を中心とする周辺2kmの白地図（A0サイズ）にカラーペンや丸シールや付せんを用いて防災地図を作製していく。白地図は神奈川県HPから「e-かなマップ」を縮尺5000分の1で印刷したA3サイズの地図を8枚張り合わせたものを使った。この張り合わせ作業は各クラスの探究係が研修前に行った。

各班に配付する物を【表1】に記す。

【表1】DIG 研修に必要な物 終了後回収

白地図（A0サイズ） 1枚	
新聞紙 3枚	
山北町防災マップ（山北高校周辺） 1枚	
まとめ用紙 1枚	
袋の中	カラーペン（紫、黒、茶、青、赤） 各1本
	丸シール（赤、黄、緑、青、白）
	付箋（水色）
	付箋（ピンク色）

○各クラス、総合的な探究の時間2コマ（50分×②）を使ってDIG研修を実施した。その進め方を以下に記す。

～DIG研修の進め方（例）（目安：①～⑧を⑤校時、⑨～⑫を⑥校時）～

- ① DIGとは、この地域で大災害が起こったことを想定して、危険箇所や問題点を知り、災害時にも落ち着いて行動できるようにするグループワークによる訓練です。
- ② 今日の目的は4つあります。
 - ①DIGのやり方を覚えてもらうこと・・・どんな道具が必要になるか、確認します。
 - ②机の上に広げてある地図に、鉄道や道路など町の構造を確認してもらい、その後、防災に関する様々な施設や危険箇所などの情報を書き込んでもらいます。
通学の際や地震などの災害の際にどのような点に気を付けたらよいかを考え、発表し合ってもらいます。
 - ③災害時の行動を地図の上で実際にイメージしてみて、いざという時にあわてずに行動できるようにするということがあります。話し合いに際しては、まず自分でイメージし、メンバーのそれぞれがイメージを話し合っ、地図から得られるイメージを鮮明にしてください。
 - ④このように地図から災害に関するさまざまなイメージを描くことができるようにしておくと、自分の知らないところで災害に遭うようなことがあっても、役立てることができます。

- 3 班活動のため、役割分担を話し合ってください。リーダー1名、記録係1名、発表係1名です。

リーダーは作業の進行を司り、記録係は出された意見を記録します。発表係は各班を代表して2分間程度で班の意見を発表します。

役割分担が決まった班のリーダーは、用具を取りに前に来てください。

(全ての班の役割分担が決まったら次にいく)

- 4 次に、机の上にある、DIG で使う用具の確認を行います。

まずは、新聞紙2枚を机の真ん中に敷いて、その上に大きな白地図を広げます。これに、分かりやすくするためにカラーペンで色塗りや書き込みをし、丸いシールや付せんの貼り付けを行います。カラーペン(紫、黒、茶、青、赤)、丸シール(赤、黄、緑、青、白)、付箋(ピンク、水色)があるか確認してください。

それから、地図に書き込む際に参考にするカラーの山北町防災マップがあると思います。山北高校が載っている面を表にして、広げておきましょう。さらに、「まとめ用紙1」と書いてあるA3の用紙があると思います。これは作業のまとめで使いますので、横に置いておいてください。以上、皆さん確認できましたか。

- 5 それでは、地図に書き込みをしましょう。

始めに、リーダーの方、地図上の本校の敷地全体を「紫色」のカラーペンで囲んでください。

今いる場所が確認できましたね。

皆さんはすでに知っていると思いますが、地図は上が「北」です。この地図は、5000分の1です。したがって、地図上の1センチはいくつですか？自分たちで計算してください。

そうです、5000分の1の5000は実際の5000センチメートルをいい、5000分の1の1は地図上では1センチを表していますので、地図上の1センチメートルは50メートルですね。

では、初めに鉄道を黒色の油性ペンの太いほうを使って塗ってください。

次に主要な道路を茶色の油性ペンの太いほうを使って塗ってください。幅が6メートル以上のセンターラインのある道路を塗ってください。トラックやバスがすれちがえる幅の道路です。地図では太い線が引かれている道路です。

(最初は、お互いに要領が分からないので時間がかかると思う。両方の作業でおおむね10分を予定する。早く終われば次へ進む。)

出来ましたか。リーダーの方確認してください。

- 6 次は、本来ですと学校、広場、公園、神社、寺、田畑、広い空地などを探し出して、災害の時に避難場所となりそうな場所を確認しますが、この地域は十分沢山あるので、今回は省略します。住宅が密集している地域では、災害の時に避難場所となりそうな場所を確認しておくことが大切です。さて次は、河川、水路、池など水に関する場所を青色のマーカーを使って塗ってください。

川幅のある河川は両側を線で塗ってください。

(5分間くらい時間をとる)

出来ましたか。リーダーの方確認してください。

- 7 ここからは、シールや付せんの貼る作業になります。全員で協力して、手際よくシールを張ったり付せんの貼ったりしましょう。山北町防災マップも使います。

まず、町役場や消防署、警察署、交番などには赤シールを貼ります。

次に、病院、医院、クリニックなどの医療機関には黄シールを貼ります。

公民館や自治会館などの公共施設などには緑シールを貼ります。

何がどんなときに利用できるかなどが分かりやすいようにシールを貼るので、色を間違えないようにしましょう。

- 8 次は、災害のときに役に立ちそうな施設を、各グループに用意してある防災地図を参考にしながら探し出し、シールや付せんを張っていきましょう。

避難所には青シールを貼り、防災倉庫には白いシールに「ボ」と書いて貼ります。

(ここまで、50分程度)

- 9 次は付せんです。

食料品・雑貨・薬・燃料などを売っているところに、ピンク色の付せんに「コンビニ」「薬」などと書いて貼りましょう。

防火水槽や消火器、プール、ため池など、消火活動の水を確保できそうなところなどに、「ミズ」と書いた水色の付箋を貼りましょう。

これも、グループの中で分担して進めましょう。

- 10 次は危険箇所です。災害時に危険だと思われる箇所を赤ペンで囲みましょう。

最初に、防災地図を見ながら、急傾斜地崩落危険区域、土砂災害警戒区域、山腹崩壊危険地区を赤ペンで囲みます。次に、大地震で崩壊するかもしれない場所(石垣・橋・高架道路・トンネルなど)を探して赤ペンで囲みます。

- 11 さて、これで学校周辺の防災地図が完成しました。今度は、この地図を見て、実際に災害が起きたことを想像してみてください。今回は大きな地震が発生したと考えましょう。DIGでは、完成した地図から災害をイメージすることも大切なことです。そしてそのイメージを頭に描きながら、グループの皆さんで、防災の視点で見た学校周辺の良いところ、悪いところを「まとめ用紙1」に書き上げてもらいます。良いところ・悪いところというのは、「こんなところが安全・安心」とか「危ない・心配」とかそういったことです。

それでは、班で話し合い、「まとめ用紙1」に発表することがらを記入しましょう。 (15分程度)

- 12 それでは発表です。「まとめ用紙1」から発表していただきます。

どのグループから行いますか？手を上げてください。

1グループ2分くらいしか時間がありません。簡単に発表していきましょう。(15分程度)

(まとめ)

実際に短い時間でしたが、皆で協力して災害時の学校周辺の様子がイメージできましたか。

普段気が付かない危険や、災害時に役立つような情報など、収穫はありましたか。今、話し合った最後の内容は、万が一災害が発生した時にはとても大切な情報だと思います。また、今回行ったように、地図から読み取ったイメージを頭に描くことや、自分の生活しているところで役に立つところや危険なところを確認してマークすることはとても大切なことだと思います。ぜひこれからも実際の生活の中で行っていきましょう。

では、最後に用具を元に戻して下さい。リーダーは前に持って来て下さい。

<山北高校周辺の防災上の留意点>

- ①がけ崩れや土砂災害 ②橋の崩落 ③道路や鉄道の寸断
- ④上流の三保ダム決壊等による浸水 ⑤病院(足柄上病院)までのけが人の運搬
- ⑥保護者との連絡(災害用伝言ダイヤル171・災害用伝言板web171)
- ⑦巨大地震後の帰宅方法または学校滞留の心得 ⑧地域住民との協力活動(救助、作業等)等

【写真】DIG 研修の様子



c 応急手当（座学）

「身近なものでできる応急手当」というテーマで、主に学校生活の中で起こる怪我や事故の対応の仕方について学習した。

はじめに、これまでの学校生活（義務教育9年間）の中で、経験したり見たりしたことのある怪我や事故について挙げさせた。小学校時代の休み時間や、中学校時代の部活動の時間など、予想以上に大きな怪我や事故を経験している生徒が多く、怪我や事故を自分事として捉えることができた。

学校で起こるケガ

- すり傷
- つき指
- 虫さされ
- 打撲
- 鼻血
- 骨折
- 物が喉に詰まる

などなど

鼻血

①上を向き、首の後ろをこゆびの付け根辺りて叩く

②鼻をつまみ、イスに座るなどして安静にする

つき指

①少し痛いのを我慢して、患部を引っ張って、指を真っ直ぐにする

②冷やして固定する

最後に、実習形式で「腕を吊る方法」と、「要救助者が出た時の搬送方法」について学んだ。

腕を吊る方法として、一般的に指導されるような「三角巾」を使用するのではなく、より生徒の身近にあると考えられる「レジ袋」を使用した。作り方は非常に簡単で、袋の持ち手部分の下から底面までを割いて、そこに腕を通し、首からかけるという方法を実践した。これなら教室や体育館等で、大人が不在の場合でも簡単に怪我人の腕を吊り、患部を安定させることが可能になる。

搬送方法については、1人で行うものと、2人で行うものの2種類を学んだ。意識のない人や痛み等で動けない人を、とりあえず安全な場所まで運ぶという目的で行い、移動距離としては10m程度とした。1人で搬送する際は、体重差があるととても難しく、救助者の体をうまく安定させることができない生徒もいた。2人で搬送する際は、1人で搬送するよりも長い距離を移動させた。搬送される側になった時に、急に持ち上げられると思った以上に怖いと感じる生徒もいた。また、移動中に体勢が崩れ、窮屈な姿勢になってしまうこともあった。

活動後に上記のような意見を共有し、実際に要救助者を搬送する際に、どのようなことに配慮しなければならぬかを理解することができた。



d 応急手当（実技）

災害現場で問われる応急手当において、心肺蘇生法は最も人命救助に役立つ知識、技術である。その手順から注意点などをまとめ、最後に全生徒が胸骨圧迫まで体験した。

50分授業の中で全生徒に胸骨圧迫を体験させることが一番の目標であったため、安全の確認、反応の確認、呼吸の観察を行った後に胸骨圧迫に入ること、胸骨圧迫のポイントは「強く」、「早く」、「絶え間なく」など、知識量は最小限に絞り教えた。その後4人の班を作成し、実習を行った。

① 傷病者の発見、救助の指示、胸骨圧迫（1分間）

安全の確認、反応の確認、反応がない場合には助けを呼び119番とAEDの手配をお願いする。

その後呼吸の観察を行い、普段通りの呼吸がないと判断し、胸骨圧迫を1分間行う。

② 救助の要請（119番通報）、AED搬送

①番から救助要請を受け、119番電話通報を行う。その際にこちらの情報をなるべく多く与えるように気を付けて電話対応を行う。また、AEDを傷病者の場所まで運ぶ。

③ 119番通報を受けてのやりとり

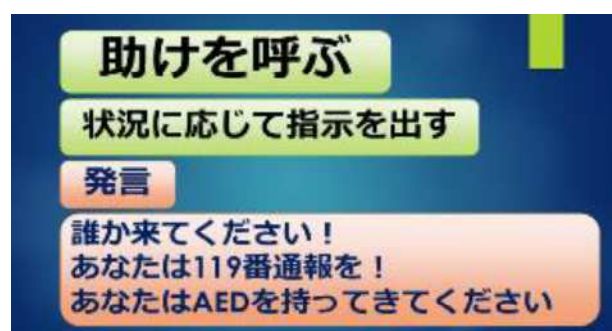
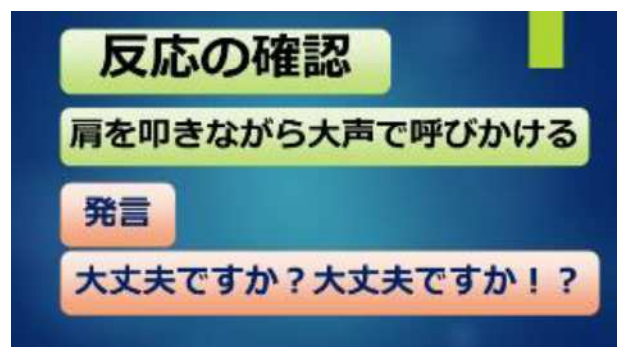
②番と119番の電話対応を行う。③番には事前に「火事ですか、救急ですか？」など台本を渡しておくが、なるべく多くの情報を聞き出すようにする。

④ 1分間のタイム計測

①番が胸骨圧迫を始めたら1分間計測開始する。また適切な場所を押しているかの観察をする。



以上のように役割分担を決めて、各々が必ずすべての役割を行うように指示をした。胸骨圧迫に関しては適切な場所を押すことが難しく、中には力がうまく伝えることができずしっかりと押すこともできない様子も多くみられた。また、1分間連続で行うことは意外ときつく、終わった後に汗をたくさんかいている生徒も多くいた。実際は救急車が来るまでは平均して7～8分かかり、それまで胸骨圧迫を続けてないといけないことを伝えると「大変だ」「きつい」などの声が聞かれた。119番通報の練習ではなかなか状況を上手く伝えられずにいた。実際の場面に出会ったらもっと慌ててしまうので、まずは場所や住所を先に伝えることが大切だということを教えた。



安全の確認

周りに危険がないか見る

発言

周りを確認、危険なし

呼吸の観察

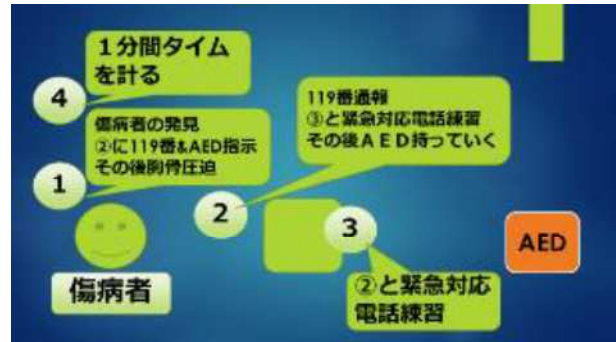
胸と腹部を頭のほうから観察

発言

普段通りの呼吸無し！

胸骨圧迫

- ①約5cm沈むくらい強く
 - ②1分間に100回のリズムで早く
 - ③連続で30回絶え間なく
- 今日は1分間頑張ろう！**



4人班をつくろう

- ①胸骨圧迫&指示
- ②119番通報&AED運搬
- ③救急電話対応
- ④タイム計測

エ 成果及び評価

生徒はこの学習を通じて、今まで考えが及ばなかった日常生活の中にある防災意識を向上させ、生徒間での共有化が進んだ。さらに、自身の経験を想起し、言語化などの表現活動をすることができた。

以下に生徒の感想文の一部を記す。

- 水がある所や(防災)倉庫・避難所を見つけて印を付けて思ったことは、山や危ない場所がたくさんありました。土砂崩れがおきたり建物が倒れたりするととても危険だと思いました。避難所があまり多くなかったので、安全な所に行くのはとても時間がかかると思いました。けれど、水を蓄えられる所は多いと思いました。
- もしものことを考えるのは少し難しかった。でも、いつ起こるかわからない災害について今から少しでもこんなときどうしたらいいのか、どう行動したらいいのかなどをすぐ行動に移せるようにしておいた方がいいと思った。もしそうなったとき、自分の命を自分で守ることも大切だが、周りの人や友達と協力して助け合っていくこともとても大切だと思った。
- 私は幼稚園のとき初めてとても大きな地震を体験しました。あの大きな地震はものすごく鮮明に覚えています。自分がその時にしていた事、その時自分が思ったこと、感じたことすべて覚えています。DIGはきっと、私が体験した地震よりも大きな地震(を想定しているの)だと思います。私が幼稚園の時思った

ことは、「お母さんに会いたい」「お兄ちゃん学校にいるかな」…と不安な気持ちになりました。幼稚園の時の私がものすごい不安を感じるのであれば、高校生になった私はもっと不安な考えが出てきたり、最悪な考えも想像できてしまう。そうすると、高校生・大人の人達の精神状態がもたなくなってしまうと思います。それを完全に解決するのは、とてつもなく難しいことです。また、もう一つの不安は夜の過ごし方です。明かりが無かったら真っ暗。火を使ってしまって、また大きな地震がきてしまったら火災になってしまふといった不安も私にはあります。こういった不安は解消していかなくてはいけないと私は思います。大きな不安をすこしずつ解消していくには地震について詳しく知ることや、今までに起きた地震の時その場にいた人から話を聞いて知識を蓄えておく必要があると私は思いました。今後いつ巨大地震がくるのか誰も分かりませんが、対策や自分たちに出来ることをやっっていこうと思います。

- 山北町を中心として災害マップを見て感じたことは、やっぱり山が多いからこそ雨が降る可能性も高く、土砂災害が起きる可能性が高いため、都会などに比べると危険性が非常に高いことが分かった。特に、山北町は少子高齢化が進んでいるため、小さな子供や高齢者が災害に巻き込まれやすく危険性が高くなってしまふ。……DIG で災害などの危険性を見つけることは、もし自分がその危険性の高い場所にいたらという危機感を持たせながらやるのが大事だという事を感じた。これからの学校生活の中でも、校舎内でも、校舎外でも、危険な場所、破損やひび割れの所などを知っておき、地震が起きた場合でも早めに行動がとれるように気を付けて生活し、この授業で気づいたことをしっかり覚えておき頑張っていきたい。
- 防災についての授業で、自分が住んでいる地域の土砂崩れしやすい場所や避難場所などを、改めてしっかり確認しておいた方がいいと思いました。災害が起きた時にどのような行動をとればいいのか考えるきっかけにもなりました。もっと災害が起きたときのことを考えた方がいいと思いました。
- 山北町もあわせてだけれど、自分がいる町などのマップを使って、水がある場所や、避難所、災害が起こりやすい場所を今まであまり考える機会が無かったので、とてもいい経験をすることができた。また、山北町だけではなく、自分が住んでいる場所や小田原なども調べたいなと思いました。
- 自分が住んでいる、通っている地域のどこに何があるのかを調べておくのは、自分のためにもなるし、とても大事なことだと改めて思いました。実際に大きな災害が起こったときの事を想定して、地震、津波などの被害を受けないような安全な場所を知っておくべきだなと思います。

オ 今後の課題

生徒の成長に焦点を合わせると、彼らが学習を通じて感じた不安や危機感を解消するための方策を考え、さらにその方策の実現に向けた課題を整理するという探究のプロセスを回せるようにすることが重要である。よって、指導する側は、そのような学習活動を生徒自らが実践できるような支援方法について、ほかの場面でも応用できるように整理する必要がある。さらに、学校としては、生徒が自ら学ぶ教育課程の編成や、地域との関係づくりについて今後整理を進めていく。

(4) フィールドワーク

ア 目的

未来探究で学習してきた山北町・未病・地域防災について、机上の学習内容と現地の様子の差異を確認する機会とするとともに、校外学習を通じて地元の方からお話を聴き、今までの学習内容を深く探究する機会とする。

フィールドワークで得られる知見を今後の探究活動につなげる。

イ 対象生徒

1 学年（196 名）

ウ 訪問先

- a 河村城跡他
- b 山北町生涯学習センター
- c 稲葉農地

エ 活動内容

a 森林セラピーコース

山北町の「森林（もり）のおもてなしガイド」の方々に説明を受けながら、山北駅から河村城跡に向けて、約1時間、散策した。

森林セラピーとは、五感を通して森を愉しみ、心身の健康増進や疾病の予防に役立てていくことを目的としたものである。

五感を通して感じることでできる癒し効果として、

見る〈視覚〉：森や景色を見ることで得られるリラックス効果

触る〈触覚〉：手や足で感じる木々の幹や落ち葉のクッションの心地よさ

聴く〈聴覚〉：風に揺れる葉の音や小鳥のさえずり、水のせせらぎなどを愉しむ

味わう〈味覚〉：新鮮な山菜やきのこなど森の恵みを堪能

嗅ぐ〈嗅覚〉：木の香り成分である「フィトンチット」などを吸収が挙げられる。

体験当日は小雨が降り続けるあいにくの天気であったが、10人程度のグループに分かれ、ガイドの方の説明を受けながら、山北駅を出発し、河村城跡を目ざした。

グループで会話が楽しめるくらいのゆっくりとしたスピードで歩くので、仲間同士の会話も多くあり、とても良い雰囲気の中での体験となった。

散策の途中、いくつかのポイントで、ガイドの方から時間をかけて周囲の説明を受けた。その際、普段はあまり意識することのない五感をフル活用し、自然を感じることができた。木の表面に触れてみたり、大木が地面から吸い上げる水の流れを想像してみたり、耳をすませ、雨音に混じった自然の音を聴き取ってみたりと、普段の生活では意識しないことに意識を向けることができた。山道をゆっくり歩き、程良く心拍数が上がった中で、自分の体の変化にも気付きながら、自然を感じることができた。



b 生涯学習センターコース

生涯学習センターの入り口付近や調理室を使用し、「竹切り体験」・「柚ジュースづくり体験」・「竹弓矢づくり体験」・「竹ポックリづくり体験」の4つの中から、2つを選んで体験した。

「竹切り体験」では、竹の“丸さ”と“硬さ”に想像以上に苦戦している生徒が多く見受けられた。のこぎりの歯の当て方や力の入れ方等について指導いただき、上達が見られる生徒もいた。また、まっすぐ切り落とすことは容易にできる生徒もいたが、切り口を斜めにするのは見た目以上に難しい作業であった。

この作業を、足場の悪い竹林の斜面で行うことを想像すると、危険を伴う重労働であることが分かる。実際の作業では、のこぎりだけでなく機械を使用するとはいえ、高い技術を要するものだと実感することができた。



「柚ジュースづくり体験」では、山北の特産品であるゆずを調理し、美味しいジュースを作ることができた。ゆずを切る包丁の手さばきから、普段、家庭では台所に立つことなどないと思われる生徒もいれば、小さく硬いゆずを器用に切ることできる生徒もいた。調理室内はゆずのさわやかな香りに包まれ、山北の地元食材の良さを実感することができた。地産地消という視点からも地元の食材を消費していくことの大切さを理解することができた。



「竹弓矢づくり体験」では、人気漫画の主人公を模した羽織を着た担当の方の指導によって、和やかな雰囲気の中での体験となった。

この竹弓矢は、矢を飛ばすのではなく、矢の先に付けたものを弓の勢いで飛ばすようなつくりになっており、小さい子供でも安全に扱えるような工夫がなされていた。

矢を部分的に削って、弓の穴の大きさに合わせる作業が難しく、苦戦している生徒が多くいた。また、弓の端をひもで張る際の強さの調節も力加減が難しく、張りが弱すぎたために、完成した後にうまく飛ばず、張り直す生徒もいた。

完成後に室内に設置された的に向かって試し射ちを行った。うまく狙い通りに的に当たるととても満足そうな表情をしていたのが印象的であった。



「竹ポックリづくり体験」では、予め用意していただいた竹の中から自分に合うものを選び、作成した。

ここでも、竹は生徒が考えていたよりも硬く、力の弱い生徒は穴を開けるのに苦労をしていた。穴を開けた後、ひもを通し、自分の身長に合わせて長さを調節した。

完成した竹ポックリを使ってみると、雨でアスファルトが滑りやすかったこともあり、操作が難しそうであった。しかし、慣れてくると、竹ポックリに乗りながらお互いに写真を撮るなど、自在に扱えるようになってきた。竹ポックリで硬い地面を移動すると、カラシコロシと、

心地よい音が響き、竹に乗るといふ“アンバランスさを楽しむ”だけではなく、普段聞かないような“音を楽しむ”といった効果もあると感じた。



c 農業体験コース

山北町の農家の方のゆず畑をお借りし、ゆずもぎを体験した。

山北町の特産品として、獅子ゆず（鬼ゆず）が挙げられるが、今回の体験では、花ゆずの収穫作業を体験した。

畑に移動する間、農家の方からゆずの収穫方法についての説明を受けた。収穫後の果実を傷つけないように、切った茎の部分を「二度切り」することの重要性を学んだ。収穫したゆずを運搬する際に傷がついてしまうことで、売値が変わってきてしまうとのことであった。

また、農家を継ぐ人が少ないため、年々農作業を行う人の高齢化が進んでいる現状があることを危惧されていた。実際に、山北町の人口の統計では、平成29年には、人口約1万人に対して、65歳以上の人口は37.4%である。また、5歳階級別人口でも、65～69歳の人口が1,188人で、最も多いという統計データが出ている。

体験前の事前説明では、収穫は1人5個から10個までとあったが、畑に到着すると、想像していた以上の果実が実っていた。

そのため、収穫できるだけ収穫しても構わないということにさせていただき、たくさんのゆずを収穫することができた。

初めは、慣れない手つきで1つ収穫するのに時間がかかっていたが、作業に慣れてくると、スムーズにできるようになってきた。慣れた手つきで作業をしていると、農家の方から「お兄ちゃん、うまいね」と声をかけてもらい、うれしそうな表情をして作業をしている姿が印象的であった。

目線の高さにある実は収穫しやすいが、木の上の方にある実は脚立を使用しなければならなかったり、低い場所にある実はかがんで作業しなければならなかったりと、農家の方の苦勞を身をもって体験することができた。

様々な分野で機械化が進み利便性が向上している中ではあるが、木が密集しているようなこういった畑での収穫作業は機械で行うことはできず、最後は人の手で収穫しなければならない。移動中の話にあったように農業に従事する方の高齢化が進む中で、10年後20年後に同じ作業を今と同じように進めていくことは困難になっていくことを感じた。

短い時間での収穫体験ではあったが、たくさんのゆずを収穫することができ、生徒達はとても満足そうであった。

収穫作業前後の移動の際に、地域についてのいろいろな話を聞くことができ、農家の方は、農作業をしながら、畑の近隣の方とのコミュニケーションを多く取っていることが感じられた。「防災」という観点から考えると、こういった近隣住民とのつながりが、地震や火事などの緊急事態が起こった時の助け合いにつながると考えられる。



オ 成果及び評価

今回の体験を通して、山北町の自然や伝統についての知識を得ることができた。教室内で見たり聞いたりする資料やデータからでは得られないことを、地元の方から教わり、指導されることで、生徒たちは自分自身の実感として、それぞれ受け止めることができた。

今後の課題設定・課題解決に向けて、この体験で得たものを生かし、深めていける見通しが立った。

この研究において、フィールドワークの重要性を再認識させる内容であり、人と人との関わりの中で、教育そのものが「生きて働く」ことに繋がっていくことを実感させられるものである。是非、今後とも続けていきたい取組である。

カ 今後の課題

事前準備に十分な時間をかけることができなかつたため、自分たちで深く調べることがほとんどないまま、教員からの事前説明のみの知識でこの体験学習を行った。そのため、ただ一方的に説明を聞いているだけの生徒が多く、ガイドの方に質問をする等の行動はほとんど見られなかつた。学校で時間が取れなくても、事前学習できる教材の開発が必要である。

フィールドワークの宿命として、学習内容と行動が天候に左右される。天候の変化に対応できる計画立案等が課題である。